無量義経十功徳品第三（続き）

（23 頁 7 行～28 頁 12 行）

善男子、第三に是の経の不可思議の功徳力とは、若し衆生あって是の経を聞くことを得て、若しは一転、若しは一偈乃至一句もせば、百千万億の義に通達し已って、煩悩ありと雖も煩悩なきが如く、生死に出入すれども怖畏の想なけん。諸の衆生に於いて憐愍の心を生じ、一切の法に於いて勇健の想を得ん。

壮んなる力士の諸有の重き者を能く担い能く持つが如く、是の持経の人も亦復是の如し。能く無上菩提の重き宝を荷い、衆生を担負して生死の道を出す。

未だ自ら度すること能わざれども、已に能く彼を度せん。猶お船師の身重病に嬰り、四体御まらずして此の岸に安止すれども、好き堅牢の舟船常に諸の彼を度する者の具を弁ぜることあるを、給い与えて去らしむるが如く、是の持経者も亦復是の如し。五道諸有の身百八の重病に嬰り、恒常に相纏わされて無明、老、死の此の岸に安止せりと雖も、而も堅牢なる此の大乗経無量義の能く衆生を度することを弁ずることあるを、説の如く行ずる者は、生死を度することを得るなり。善男子、是れを是の経の第三の功徳不思議の力と名づく。（23 頁 7 行～24 頁 8 行）

良き志を持つ者よ、第三のこの経の理解を超えた良き影響力とは、もし衆生がいたとしてこの経を聞く機会を得た者は、たった一節、或いはたった一行、或いはたった一句を聞いただけでも、すぐに百千億通りの教えを深く悟る事ができ、煩悩があるものでも煩悩がないかのごとく、生き死にするような場面においても畏れを心に感じることもありません。諸々の生命のあるものすべてを哀れむ心が生じ、何事にも果敢に取り組む姿勢を持つようになるでしょう。

勇壮な力士が重い人をかついだり持ったりするように、この経を常に保持して読誦する者もまたこれと同じなのです。最上の完全な悟りという重い宝を荷い、生命のあるものすべての苦悩を荷い、生まれ死んでいく苦悩の道から救い出すのです。

未だ自らを悟りの境地に導けない者も、他の人を悟りの境地に導くことができるのです。船主が重病になり、全身が動かなくなり岸に停泊していたとしても、堅牢に造られた船というのは常に多くの人々を向こう岸に渡せることを説得して、船を貸して渡ってもらうように、この経を常に保持して読誦する者もまたこれと同じなのです。自身は五つの世界（地獄・餓鬼・畜生・人間・天上）で、身をもって次から次へと百八の重い苦しみに悩まされながら、無智と老いと死の（迷いの世界の）こちらの岸に留まるが、彼らは、この素晴らしく頼りになる無限の意味が備わる全ての者を悟りの岸へと渡す経を持っており、それによって、全ての生きとし生けるものを救う事ができ、それを説かれたとおりに行じる者は生死の繰り返しからの解放に到達することが出来るのです。良き志を持つ者よ、これがこの経の第三の理解を超えた良き影響力というものです。

善男子、第四に是の経の不可思議の功徳力とは、若し衆生あって是の経を聞くことを得て、若しは一転、若しは一偈乃至一句もせば、勇健の想を得て、未だ自ら度せずと雖も而も能く他を度せん。

諸の菩薩と以って眷属と為り、諸仏如来、常に是の人に向って而も法を演説したまわん。是の人聞き已って悉く能く受持し、随順して逆らわじ。転た復人の為に宜しきに随って広く説かん。

善男子、是の人は譬えば国王と夫人と、新たに王子を生ぜん。若しは一日、若しは二日、若しは七日に至り、若しは一月、若しは二月、若しは七月に至り、若しは一歳、若しは二歳、若しは七歳に至り、復国事を領理すること能わずと雖も、已に臣民に宗敬せられ、諸の大王の子を以って伴侶とせん、王及び夫人、愛心偏に重くして常に与みし共に語らん。所以は何ん、稚小なるを以っての故にといわんが如く、善男子、是の持経者も亦復是の如し。諸仏の国王と是の経の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生ず。若し是の菩薩是の経を聞くことを得て、若しは一句、若しは一偈、若しは一転、若しは二転、若しは十、若しは百、若しは千、若しは万、若しは億万恆河沙無量無数転せば、復真理の極を体ること能わずと雖も、復三千大千の国土を震動し、雷奮梵音をもって大法輪を転ずること能わずと雖も、已に一切の四衆、八部に宗み仰がれ、諸の大菩薩を以って眷属とせん。深く諸仏秘密の法に入って、演説する所違うことなく失なく、常に諸仏に護念し慈愛偏に覆われん、新学なるを以ての故に。善男子、是れを是の経の第四の功徳不思議の力と名づく。（24 頁 8 行～26 頁 3 行）

良き志を持つ者よ、第四のこの経の理解を超えた良き影響力とは、もし衆生がいたとしてこの経を聞く機会を得た者は、たった一節、或いはたった一行、或いはたった一句を聞いただけでも、力強くすこやかになり、未だ自分自身で悟りの境地を開くことができなくても他の人を悟りへと導くことができるのです。

諸々の菩薩の協力を得ることができ、諸仏如来はいつもそのような人の傍にいて、彼らの為に法を説かれるのです。そのような人はそれを聞き終わって悉く理解し、保持し、逆らうことなくその通りに従います。そして、今度は他の人の理解力に応じで広く多くの人に説くのです。

良き志を持つ者よ、このような人は国王とその夫人に生まれた新たな王子に喩えられます。あるいは一日あるいは二日あるいは七日に至り、あるいは一か月あるいは二か月あるいは七ヶ月に至り、あるいは一年あるいは二年あるいは七年に至り、やはり国事を領有して管理することはできないにないにしても、臣民に敬われ、諸々の大王の子を伴侶とするでしょう、王と夫人は、一心に愛情をもって接し寄り添い語りかけるでしょう。理由は何故かというと、まだ幼く小さいからです。それと同様に、良き志を持つ者よ、この経を常に保持して読誦する者もまたこれと同じなのです。国王に喩えられる諸佛と、国王の夫人にも喩えられるこの経が和合して、共にこの菩薩である子を生ずるのです。もしこの菩薩がこの経を聞く機会を得て、たった一句でも、たった一偈でも、たった一回でも二回でも十回でも百回でも千回でも一万回でも一億万回でもガンジス川の砂の数ほどの無量無数回でも聞けば、また真理の極みを体現することはできなくても、また三千大千の世界を振動させ、雷のように大きな清き

声で仏法を説くことはできないとしても、すでに出家者や在家の男女や八部衆に仰がれ、諸々の大菩薩たちの協力を得る事ができるでしょう。深く諸仏の深遠で容易に知りがたい奥義の教えを感得し、それを説くのに間違いもなく言い忘れることも無く、常に諸仏からひたすらに気にかけてもらえて大切に保護されるのです。まだ学び始めたばかりだからです。
良き志を持つ者よ、これがこの経の第四の、理解を超えた良き影響力というものです。

善男子、第五に是の経の不思議の功徳力とは、若し善男子、善女人、若しは仏の在世若しは滅度の後に、其れ是の如き甚深無上大乗無量義経を受持し読誦し書写することあらん。是の人復具縛煩悩にして、未だ諸の凡夫の事を遠離すること能わずと雖も、而も能く大菩薩の道を示現し、一日を演べて以って百劫と為し、百劫を亦能く促めて一日と為して、彼の衆生をして歓喜し信伏せしめん。
善男子、是の善男子、善女人、譬えば龍子始めて生れて七日に、即ち能く雲を興し亦能く雨を降らすが如し。善男子、是れを是の経の第五の功徳不思議の力と名づく。
（26 頁 4 行～26 頁 11 行）

良き志を持つ者よ、第五のこの経の理解を超えた良き影響力とは、仏がこの世にあるときまたはこの世を去られた後に、もしも良き志を持つ男性または女性で、この奥深く比類なき全ての者を悟りへと導く無限の意味を持つこの経を、受持し、信奉し、暗誦し、読誦し、書写する者は、その人自身がまた煩悩に縛られていて、未だ愚かな人間の行いを遠ざけられずにいたとしても、それでもよく偉大なる菩薩の道を示し現し、一日を百劫という極めて長い時間にも延ばし、百劫をまた縮めて一日とし、それを聞く衆生に喜びをもたらし、確信してもらえるでしょう。
良き志を持つ者よ、これらの良き志を持つ男性や女性は、例えていえば、龍の子供が、生まれて 7 日目によく雲を起こし雨を降らせるようなものです。良き志を持つ者よ、これがこの経の第五の、理解を超えた良き影響力というものです。

善男子、第六に是の経の不可思議の功徳力とは、若し善男子、善女人、若しは仏の在世若しは滅度の後に、是の経典を受持し読誦せん者は、煩悩を具せりと雖も、而も衆生の為に法を説いて、煩悩生死を遠離し一切の苦を断ずることを得せしめん。衆生聞き已って修行して得法、得果、得道すること、仏如来と等しくして差別なけん。
譬えば王子復稚小なりと雖も、若し王の巡遊し及び疾病するに、是の王子に委せて国事を領理せしむ。王子是の時大王の命に依って、法の如く群僚百官を教令し正化を宣流するに、国土の人民各其の要に随って、大王の治するが如く等しくして異なることあることなきが如く、持経の善男子、善女人も亦復是の如し。若しは仏の在世若しは滅度の後、是の善男子未だ初不動地に住することを得ずと雖も、仏の是の如く教法を用説したもうに依って而も之を敷演せんに、衆生聞き已って一心に修行せば、煩悩を断除し、得法、得果、乃至得道せん。
善男子、是れを是の経の第六の功徳不思議の力と名づく。（26 頁 12 行～27 頁 12 行）

良き志を持つ者よ、第六のこの経の理解を超えた良き影響力とは、仏がこの世にあるときまたはこの世を去られた後に、もしも良き志を持つ男性または女性で、この奥深く比類なき全ての者を悟りへと導く無限の意味を持つこの経を、受持し、信奉し、暗誦し、読誦し、書写する者は、自らが煩悩を持っていようとも、衆生のために法を説き、煩悩や生死を克服して、あらゆる苦しみに終止符を打つことを可能にするのです。それを聞いた衆生がその通りに実行すれば、法を悟り、その成果を得、道を究める事ができるのは、仏や如来によってそうできるのと同じで、何も変わらないのです。

たとえば王子がまだ小さいとしても、もし王が各地を巡り歩いたり病気になったりしたときは、この王子に任せて国事を管理させる。王子はこのときに大王の命令によって、法律に従って官僚たちに命令し正しいことを述べ伝えると、国土の人民はその要領に従うが、それは、大王が納めるのと同じであり異なることがないように、この経を受持する良き志を持つ男女もまたこれと同じことです。仏がこの世にあるときまたはこの世を去られた後に、もしも良き志を持つ者が、未だ菩薩の第八位の自然に菩薩行が行われる状態にまで至っていなくても、仏がこのように説かれた教法に依って、広く法を説き、それを聞いた衆生が一心に修行すれば、煩悩を断ち捨て去り、仏法の真理を会得し、その成果を得、無上の悟りまで得るでしょう。

良き志を持つ者よ、これがこの経の第六の、理解を超えた良き影響力というものです。

善男子、第七に是の経の不可思議の功徳力とは、若し善男子、善女人、仏の在世若しは滅度の後に於いて、是の経を聞くことを得て、歓喜し信楽し希有の心を生じ、受持し読誦し書写し解説し説の如く修行し、菩提心を発し、諸の善根を起し、大悲の意を興して、一切の苦悩の衆生を度せんと欲せば、未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し、即ち是の身に於いて無生法忍を得、生死、煩悩一時に断壊して、菩薩の第七の地に昇らん。

譬えば健かなる人の、王の為に怨を除くに、怨既に滅し已りなば王大に歓喜して、賞賜するに半国の封悉く以って之を与えんが如く、持経の善男子、善女人も亦復是の如し。諸の行人に於いて最も為れ勇健なり。六度の法宝求めざるに自ら至ることを得たり。生死の怨敵自然に散壊し、無生忍の半仏国の宝を証し、封の賞あって安楽ならん。

善男子、是れを是の経の第七の功徳不思議の力と名づく。（28 頁 1 行～28 頁 12 行）

良き志を持つ者よ、第七のこの経の理解を超えた良き影響力とは、仏がこの世にあるときまたはこの世を去られた後に、もしも良き志を持つ男性または女性で、この経を聞く機会を得て、歓喜し教えを信じ喜び希有な心を生じ、受持し、読誦し、書写し、人に説き、教えのとおりに修行し、悟りを求めようとする心を起こし、諸々の良い結果をもたらす行為をし、大いなる慈悲の心を起こし、全ての苦しむ衆生を悟りに導こうとするなら、未だ六つの徳目を完成する修行をしていなくても、六つの徳目は自然に完成し、この身をもって生きている間に、あらゆるものが本来的には生じる事も滅する事を無い事を認識する事ができ、生死や煩悩の迷いもただちに断ち切って菩薩の第７位の状態に昇ることができでしょう。

それはたとえば、勇士が王のために敵を除いてしまったならば、敵がすでにいなくなり王は歓喜して、国の半分を褒美として与えるようなもので、仏の教えを銘記して忘れずにまもる仏法を信ずる人々もまたこれと同じことです。諸々の仏道を修行する人の中で最も力強く健やかなのです。

六つ徳目の完成を求めなくても、自然に完成に至り、生死の苦しみという敵は自然にいなくなり、あらゆるものは本来的には生じる事も滅する事も無いという仏の悟りの世界の半分を宝として確証し、それらの褒美によって安泰に暮らすことができるのです。

仏良き志を持つ者よ、これをこの経の第七の理解を超えた良き影響力というものです。

＜用語解説＞

〇六波羅蜜：波羅蜜（Pāramitā、 パーラミター）とは、完成することを意味し、六波羅蜜とは以下の六つの徳目で完成に域に達すること意味する。

１．布施波羅蜜 － （Dāna ダーナ）は、分け与えること。
２．持戒波羅蜜 － （Śīla シーラ）は、自律すること。
３．忍辱波羅蜜 － （Kṣānti クシャーンティ）は、気にしないこと。
４．精進波羅蜜 － （Vīrya ヴィーリヤ）は、努力すること。
５．禅定波羅蜜 － （Dhyāna ディヤーナ））は、こころを安定させて集中すること。
６．般若波羅蜜 － （Paññā パンニャー）は、通りを悟る深い智慧を身につけること。

〇無生法忍：あらゆるものは、本来、空であり。生じるものでも滅するものでも無い事を認識すること。